



Title	IDUN 14号 刊行にあたって
Author(s)	
Citation	IDUN. 2001, 14
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/95681
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

IDUN 14 号刊行にあたって

本誌も、1973 年の創刊号を出してのち順調に進み、14 号を迎えることとなりました。本誌創刊当時、当研究室はデンマーク語学科で、専任スタッフもわずか 3 名でしたが、その後、1985 年のデンマーク・スウェーデン語学科を経て、1993 年の大学改革によって地域文化学科中・北欧専攻のデンマーク語とスウェーデン語となり、専任スタッフは外国人教師を含めると、本誌創刊当時の 3 倍の 9 名になりました。それゆえ本誌執筆者も 3 倍になり、ますます充実してきましたが、本号はそれにも増してずいぶんと厚手の立派な装丁になったことと思われます。と申しますのも、本号は間瀬英夫教授の御退官を記念する特別号であり、研究室のスタッフに加えて、歴代のデンマーク人教師をはじめとし、非常勤講師として長年にわたりお手伝いをしていただいている諸先生方、間瀬先生とゆかりのある北欧学の「仲間」である他大学の諸先生方、先生の教え子のうち研究に携わっている若き研究者諸氏がお祝いの意を込めて寄稿してくださったからです。この場を借りて御礼申し上げます。掲載の論文はデンマークとスウェーデンの言語、文学、現代社会、歴史を中心にその他の北欧に関するものに加えて、日本語教育に関するものまで多岐にわたっております。

顧みますと、間瀬先生は本学にデンマーク語学科が設置された 7 年後の 1973 年にそれまで活躍されていたデンマークから赴任されました。そして、在職期間の大方を学科主任、のちには専攻語代表として学科の運営に尽力してこられました。間瀬先生はコペンハーゲン大学言語学・音声学科で主に音響音声学を研究され、ご赴任当時としては、おそらくわが国唯一のデンマーク語音声学・デンマーク語文法のご専門家であったと思われます。今でこそこれらの分野の研究者たちが日本の諸研究機関で活躍されているのは、一つには間瀬先生の御薫陶を受けた教え子たちがいるからこそでしょう。本学では研究に必要な機器類等が不足しており物理的理由から音響音声学を続けることは困難であったようですが、「デンマーク語文法演習」と「ノルド語音韻論」の授業、ならびに多数の公刊論文を通して、デンマーク語文法や音声学・音韻論の楽しさと、学問に対する姿勢のあり方を、学生と私たちスタッフにも伝えてこられたばかりではなく、日本のデンマーク語学の創始者として日本における北欧学に新たなページを開かれました。また特定の言語理論や学派にとらわれず、言語を様々な角度から観察・分析し、真理を求めようとされる、先生の言語に対するご姿勢は——デンマークの言語学者 Niels Ege 先生のイメージに重なるものがありますが——日頃の座談にもよく窺われ、私たちスタッフは啓発されることが少なくありませんでした。また、音楽や絵画といった芸術に対する造詣の深さや、趣味の域をはるかに超えたスケッチやデンマーク・クロスステッチの作品の数々にはただただ驚嘆の声をあげるばかりです。その一端を、間瀬先生のご好意により、本誌の表紙や本文中に挿入したスケッチなどで紹介できましたのは、私たちにとって大きな喜びです。

卒業生の中には先生を慕って卒業以来連絡を絶やさない人が多数いることから分かるように、学生たちに対しては実の父親のように、時には厳しく、しかし常にやさしく接してられました。

こうした余人をもって代えがたい間瀬英夫先生をいよいよ本年3月末にお送りしなくてはならないことは、私たち一同にとって大きな損失であります。間瀬先生は御退官後、故郷の小田原に戻られます。A棟6階の、はるかエレベーター前まで聞こえてきそうな、間瀬先生のあの高らかな笑い声が今後はもう聞かれなくなるかと思うと寂しい気持ちになりますが、この先数年間は「ノルド語音韻論」の授業を集中講義で受け持っていただけるそうですので、夏と冬の年2回は再びA棟6階はにぎやかになることでしょう。また、デンマーク語－日本語辞典の編集をはじめ、先生にご指導・ご助言を願わねばならないことがまだまだ山積みされております。今回、間瀬先生より本誌のために特別寄稿としてデンマーク語・スウェーデン語両言語に関わる問題を扱った論文をいただきましたことは、北欧語学に携わる私たちにとってきわめて幸運でした。今後ともよろしくご指導して下さるようお願いいたします。それと同時に、さらなるご活躍とご健康をお祈り申し上げます。

ところで、1999年12月初旬にデンマークから今日もっとも注目されている女性作家の一人 Susanne Brøgger を国際交流基金の後援でお招きし、「喪失の世紀としての20世紀——カーレン・ブリクセンの人生を通して——」という題で講演していただきました。講演の後には共同研究室にて和やかな懇談のときを持ち、現代デンマーク文学事情について貴重なお話を伺うことができました。そして同月中旬にはスウェーデンからの視察団をお迎えしました。日頃から図書の寄贈を受けたり、私たちの学生のスウェーデン語サマーコースの受け入れなどでお世話になっている Svenska institutet から Anne-Charlotte Liman 課長、Mälardalens högskola 大学からは John Svenske, Ann-Margret Sandbäck, Barbro Ekman 各講師、そして国際事務担当の Carina Orsborn, そして Göteborg 大学の Noriko Tunman 教授の6名で、赤木攻学長を表敬訪問された後、スウェーデン語の授業を見学、そして昼食をはさんで、歓談しながら活発な意見交換をしました。

さて、前号刊行以後に私たちの研究室ではさまざまな異動がありました。1999年度末に、斉藤弥生助教授（スウェーデン現代社会担当）の大阪大学大学院への転出があったのに加えて、デンマーク人教官 Martin Paludan-Müller 先生の本学デンマーク語・スウェーデン語の教育・研究にとって大きな痛手ですが、なにぶん阪大と本学は近くですので、斉藤さんにはこの先も非常勤講師としてお手伝い願えるとのことでした。

Martin は12年間の長きにわたって非常に熱心に学生の指導をしてくれたばかりでなく、教養豊かで、学識も高く、また非常に温厚な人となりで、私たちの良き同僚でしたので、彼のデンマーク帰国は私たちスタッフにとっていっそう残念

なことでした。しかし、ご子息 Kaj 君のデンマーク人としてのアイデンティティ育成や今後の教育のことを考えると仕方のないこととせざるを得ません。ただ Martin 帰国後も、スタッフをはじめ、学生の多数がコペンハーゲンに相談や質問の E メールを送っていますし、春や夏の休みには Martin 宅を訪れている様子です。

2000 年 4 月に斉藤弥生さんの後任として、高橋美恵子講師が赴任しました。高橋さんはスウェーデンに 12 年間滞在し、ストックホルム大学で家族社会論の研究を積んできています。担当のスウェーデン現代社会ばかりでなく、スウェーデン語教育の方でも大いに活躍が期待されます。

Martin の後任としては、Pia Quist (Jensen) 教官が赴任しました。一昨年にコペンハーゲン大学を終え、Cand. mag. (=修士号+α) になったばかりの、「第 2 言語としてのデンマーク語獲得」を専門とする新進気鋭の学者で、コペンハーゲン大学付属のデンマーク方言学研究所 Institut for Dansk Dialektforskning で研究員を務めていました。若くて学生諸君に大いに好かれています。

さて、3 月 31 日には間瀬先生のほかにもうお一人、本学を去られる先生がおられます。3 年間の任期を終えられたスウェーデン人教師の Anna Thure 先生です。専任のスウェーデン人教師のいなかった 3 年前までと比べると、彼女の赴任以来、学生たちがスウェーデン語に触れる機会が増え、学習効果が大いに上がったと思われます。4 月からは後任にスウェーデン語教育のエキスパートの先生が内定しております。

学生諸君の動向としましては、これまで通り、日常の勉学に励みつつ、秋の大学祭では恒例のデンマーク語とスウェーデン語それぞれによる語劇を上演しました。また、毎年一部の学生が両国へ留学しております。ただ来年度は際立っており、デンマーク政府国費留学とは別に、デンマークの folkehøjskole に 1 年間留学する学生が、新 3 年生、新 4 年生に数名ずつおりますし、スウェーデンの folkhögskola 留学予定者が新 4 年生の中に多数おります。また、3 月末には、わが国初のデンマーク語の中学校・高等学校教諭一種免許状を取得する学生がいることも申し添えておきます。

最後に、1997 年度から大学院前期課程（修士課程）でデンマーク語とスウェーデン語を学ぶことができるようになり、本誌前号でご報告した通り、1998 年度にデンマーク語専攻に 1 名、今年度に 1 名が入学しております。来年度はスウェーデン語専攻に 4 名の院生が入学いたします。スタッフ一同、研究者を養成する責任を改めて痛感いたしております。

2001 年 2 月 1 日

大 阪 外 国 語 大 学
デンマーク語・スウェーデン語研究室